

確かな知識・技術を活かし、生活を工夫し豊かにすることができる家庭科学習

— 実践的・体験的な活動を通じ仲間とのかかわりの中から思考力・判断力・表現力を育てる —

1. 家庭科で願う豊かな学びの姿

家庭科では、自己と家庭、家庭と社会とのつながりを重視し、これからの生活を展望して、よりよい生活を送るための能力と実践的な態度の育成をめざしている。そのためには、実践的・体験的な学習活動を通して、生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに、家庭の機能について理解し、これからの生活を展望して、課題をもって生活をよりよくしようとする能力と態度を育てていくことが重要である。

これらから家庭科でめざす「豊かな学びの姿」を以下のようにまとめた。

- 生活に必要な基礎的・基本的な知識や技術について、これまでに習得した学習内容を活かしつつ発達段階に応じた内容を確実に習得しようとする姿。(基礎・基本の習得)
- 実際の遊びや暮らしの中でそれらの生活をより豊かにするため、習得した知識や技術を活用し、その生活の中の課題に気づき自ら解決しようとする姿(基礎・基本の活用と課題の解決)
- 集団の中の一員として、共に学び互いに協力し高まり合いながら学ぶ姿(集団での高まり合い)

このような豊かな学びの具体的な姿は、生徒の学習のふりかえり等(①～④)からうかがわれる。

〈①中学校から小学校の学習をふりかえって〉

小学校のときは、肉を切ったことがなかったので、中学校の調理実習で肉を切るときの包丁の使い方や上手な切り方を知ることができました。小学校で習ったことで活用していることは、野菜の切り方で、輪切りなどを中学校で活用しています。また、「いためる」ことも活用しています。中学校では、もっといためることが多くなっていくので、これからも活用していきたいです。

〈②中学校になってできるようになったこと〉

調理実習を2回行い、計画段階で手順をしっかり覚えたり、実際に実習を行ったときに火加減や力のいれ具合を知ることができた。家庭科の学習は言葉ではなかなか表せないような点がけっこうあったが、そのようなことを感覚的に学ぶことができた。

〈③中学校になってできるようになったこと〉

中学校になって、他の人といっしょに料理を作るときは、自分が手があいていたら進んで片づけをすませ、みんなや自分が料理しやすい環境にすることがとても大事なことがわかった。料理も何回も経験してきたので、少しおいしく作れるようになったと思う。

〈④小学校の家庭科と中学校の家庭科を比べての感想〉

中学校では個人で作るのではなく、グループで協力して作るが多かったので、計画は個人るときよりも大変だったが、その分料理の詳しい知識をみんなで学び合えたのでとてもよかったと思った。

これらは、発達段階に応じて学び、それぞれの生活の中での実践を通して身につけられ、生涯を通じて活かされる力であり、「生活をより豊かにしていこうとする力」の基盤をなすものである。家庭科では、生活の営みを総合的にとらえ、生涯を見通して生活していけるように、5年間の家庭科の学習を統合し、連続した学びとしてとらえていくことが大切であると考えた。

2. 昨年度までの研究の経緯

(1) これまでの研究では、小学校の家庭科と中学校の技術・家庭科との連携を図り、小学校5年生から中学校3年生までの5年間を見通した指導や題材の工夫を行ってきた。

①「衣・食・住・家庭生活・環境・ものづくり・情報」の7領域から5年間を見通した題材配列表を作成し、複数の領域を合わせた題材や指導方法を工夫した。

・小学校5年生の家庭科の「食生活」と技術分野の「ものづくり」を合わせ、自分の使う「はしづくり」を行い、調理実習の試食時に使用した。

・小学校の家庭科と中学校の家庭分野を「環境」の観点からつないで、食品の選択とフードマイレージの学習や生ゴミのリサイクルやEM石けんなど環境に配慮した調理実習を取り入れた。

②教科としての基礎・基本の定着を図るため、基礎的・基本的な学習内容の洗い出しや実習での指導方法等の統一を行った。

・衣、食に関する基礎・基本技術の一覧表を作成し、指導内容を明確にし、くり返し学習しながら、5年間を通して確実に身につけられるように題材を配列した。

・小学校と中学校の調理室の調理用具、使い方を統一したり、被服製作のミシンやアイロンの規格をそろえて、用具の使い方などの基礎的な技術が習得しやすいように環境を整えた。

(2) 昨年度は、「子どもの学びをとらえる」として、以下の2点について研究を行った。

①教師が子どもの学びをとらえる

主に学ぶ過程での観察法、製作品の評価による製作物法、スキルテストによる技能テスト法、総合的な理解を見るペーパーテスト法等によりとらえた。課題解決の力は教師の「見取り」や自己評価表、生活へのレポート法等でとらえた。家庭科の被服製作や調理実習では、一人一人の技能の習得状況をとらえるのにスキルテストがとても有効であった。

②子ども自身が自分の学びをとらえる

各題材ごとのふりかえりや学習の履歴による自己評価・相互評価を行った。基礎的な知識や技術の習得のために、「釘打ち」や「ボタン付け」、「いためる調理」などで、それぞれの段階に応じた技能診断カルテ等を活用した。ここでは個別の技能についてより具体的な評価規準を明確に示し、これを相互に評価することで、自らの技能を客観的に診断してだけでなく仲間どうしで技能を高め合う学びの場になった。また、実習や製作において、計画表、作業分担表などを活用することによって、作業内容や自分の役割がより明確になり、意欲的に活動に取り組むことができた。

また、6年生の家庭科では、コンピュータのグラフを使って献立作りを行い、視覚的に栄養のバランスを考えることができた。

3. 本年度の研究

研究の視点

(1) 思考力・判断力・表現力を明らかにする

①家庭科における「思考力・判断力・表現力」

家庭科における思考力・判断力・表現力は、それぞれが単独のものでなく互いがかかわりながら身につけていくものである。

家庭科の学習では、実践的・体験的な学習活動の中で、自分の知識や技術を高めていきながら、試行錯誤をくり返し、より良いものを見つけたり、より適した方法を探したりしながら、製作品や生活環境、家族関係などを最善なものに作り上げていくことをねらいとしている。

例えば、調理をするときは、できあがりの料理を予想して、材料を準備したり、作り方の手順を考えたりする。できあがりを予想するためには、その料理にどんな材料が使われているのか、どのような調理方法で作られているのかを知り、手順はどうしたらよいか、時間はどのくらいかかるのか考えていかなければならない。

また、家庭科において、結果は時と場合によりいくつもあり、その中で自分や家族のためによりよい

ものをめざして実践していくことが重要である。調理をするとき、レストランの料理の味は、客に対していつも変わらぬ同じ味を提供することが大切だが、家庭の料理は、相手の好みや栄養、体調などに合わせ家族にとって一番よいものを作ることが重要になってくる。そのため家庭の味は家族によって異なり、結果は一つではない。

このように、家庭科においては条件や状況に合わせて考え、実践していく力が必要である。

②伸ばしたい力とその方策

実践的・体験的な学習活動を通して学んでいく家庭科では、発達段階に合わせ、学習活動の中に意図的に課題解決の場面を取り入れて、その過程の中で「思考力・判断力・表現力」を育てていきたい。

本年度は、特に「衣生活」を中心に研究を進めていきたいと考える。そのために製作において、完成した姿や結果を予想し、方法、手順などを見通して計画を立て（思考力）、それを実践するために、条件に応じてそれぞれの中から最適な方法、手順などを選び（判断力）、確かな知識と技術で実践していく力（表現力）を育てていくことをめざす。

その方策として、次のような取り組みを行った。

(i) 確かな知識と技術を身につけるために、題材を段階的に設定する

「基礎・基本技術の一覧表」をもとに、それぞれの発達段階に合わせた知識・技術の習得のために、指導方法の工夫と題材の選定を行い、5年間を通してくり返し学習しながら基礎・基本技術を確実に定着できる学習過程を考える。基礎縫いや被服製作の基本（採寸、型紙、裁断、しるし付け、しつけ縫い、本縫い、仕上げ）などを段階的に取り入れながら、習得できるようにしていきたい。

(例) 製作題材と基礎・基本技術

	小学5年生	小学6年生	中学2年	中学3年
製作題材	ランチョンマット (ミシン縫い)	エプロン (ポケット付け)	弁当入れ	ハーフパンツ
	小物作り (手縫い)			
	ネームプレート (手縫い)			
基礎 基本 技術	立体構成 (採寸、型紙、裁断、しるし付け、 しつけ縫い、本縫い、仕上げ)			
	平面構成 (採寸、型紙、しるし付け、しつけ縫い、本縫い、仕上げ)			
	ミシン縫い (直線縫い)		(ジグザグミシン縫い)	
	基礎縫い (玉結び、玉どめ、ボタン付け) (なみ縫い、返し縫い、かがり縫い)		(まつり縫い、スナップ付け)	

(ii) 予想、見通しをもった計画が立てられるために、実習・製作の過程を段階的に配置する

実習・製作における準備、計画の立て方、作業の行程、仕上げ、反省・評価など、基本の学習の流れを知り、児童・生徒自らが課題解決のために先を見通すことができるように、全体計画の中で指導内容や題材配列の工夫を行う。

被服製作においては、紙で完成した姿を試作して予想したり、型紙を用いて構成や製作方法を考え、製作するための材料や用具、手順を考えて製作計画を立てさせる。また、製作を進める中で、できあがり状況を確認しながら作品をよりよいものに仕上げさせていきたいと思う。さらに、完成した作品は実

際に使用して、使い勝手や丈夫さなど実生活の中で活用できるか確認し、修正・補強等をさせたいと考えている。そのため、小学校6年生で製作するエプロンは、調理実習で着用し、中学校3年生まで使用することを想定して製作させる。また、中学校2年生の弁当入れも、毎日の使用に耐えるものを製作させ、自分でも手入れ、補修ができるようにしたいと思う。

(iii) 最適な方法、知識や技術を選択し、工夫して活かす場面を設ける

習得している知識・技術や、新たに習得する知識・技術を用いて、課題解決のために適した手段・方法を工夫し、活用する場面を設けることで、判断力を育てる。

製作題材は、基礎的な作品から応用・発展的な作品にまで取り扱えるものを選び、生徒自身の知識や技術に合わせて製作できるようにしたい。例えば、型紙は同じものを用いても、自分のサイズに補正したり、ポケットを工夫したり、無地の布を用いて飾りなどのデザインを工夫したりできるようにしたい。製作と製作の間には、基礎的な技術をくり返し練習しながら、さらに上達できるような過程を設けたい。以下はその「ボタン付け」の例である。

製作題材	小学5年生		小学6年生		中学2年生	
	基礎縫い	ネームプレート	かんたんな手入れ	エプロン	衣服の手入れ	弁当入れ
二つ穴ボタン	○	○			○	○
四つ穴ボタン	○		○	○		
スナップボタン					○	○

(iv) かかわりやつながりを考えた学習を取り入れる

これまでも環境、消費生活の視点で学習の関連を図ってきたが、新学習指導要領では、「家庭に関する教育を体系的に行う視点から、小学校での学習を踏まえ中学校での学習のガイダンス的な内容を設定するとともに、他教科との関連を明確にし関連を図る」こととしている。「家族・家庭」、「食生活」、「衣生活と住生活」、「消費生活と環境」それぞれの内容や他教科の内容と関連させながら、広い視野から学習が進められるように題材構成や指導の工夫を行い、実生活の中で活かしていけるより実践的な力を身につけさせたいと考える。

特に「衣生活」においては、「衣服の手入れ」の洗濯で、洗剤の濃度や水の使い方を環境の視点から取り上げたり、「衣服の計画的な活用と選択」で、「物資・サービスの適切な選択、購入、活用」と関連させながら取り扱いたいと思う。

(2) かかわり合いの中で思考力・判断力・表現力を育てる

①学習形態（一人学習、ペア学習、グループ学習）

実習・製作などを行う形態として、学習場面や発達段階に応じて一人学習、ペア学習、グループ学習などの異なった学習形態を取り入れていく。例えば、基礎的な学習（一人学習）→発展的な学習（グループ学習）の場合、基礎的・基本的な知識・技術を習得した上で、グループで互いに意見を出しながら協力して課題解決していく力（思考力）が身につくと考えられる。また、相互評価（ペア、グループ学習）→自己評価（一人学習）の場合、評価の観点を共有することで、互いの技能を高め合うことができるとともに、自己を客観的に評価できる力が育つと考えられる。これは表現力を高めるとともに判断力のものとなるものと考えられる。

②自己評価・相互評価

作品の考案、計画、技能診断、作品の仕上げ、活動のふりかえり等の中で児童生徒の自己評価・相互評価を取り入れていく。客観的に作品や活動が評価できるように、評価の観点を明確にして、自己の成果や課題に気づかせる。また、互いに評価し助言することで、意欲を高め、次の製作や活動に活かせるようにしたい。

（文責 井上富美子）